

元医師だった父の上手な平穏死

医師、作家 久坂部 羊

- *上手に死ぬために必要なこと
- *麻酔医だった父の医療行為を見る視点
- *延命治療をいかに考えるべきか
- *実は死や老いに医療は無力
- *検査をしない道を選んだ父
- *父はストレス諸悪の根源説が口癖
- *壊死した足の指が回復した
- *ガンと言われて喜んだ父
- *医者にはガン死が人気
- *医療の出来高払い制度も問題点のひとつ



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

今日は作家で医師であります久坂部さんに来ていただきました。麻酔科医、外科医を経験された後、若い頃からの夢であった作家ということも2000年代に入ってからデビューをされておられます。私も実は10年ぐらい前、先生の『日本人の死に時』という本を読ませていただいてたいへん感銘を受けました。というのは、私の父が多発性脳梗塞ということで晩年はかなりいろいろな思いを自分自身でしたものですから。人間は生きていく以上、必ず死ぬわけですから。上手に死ぬ、平穏に死ぬということがいかに大切かということをもつて経験いたしました。こういったお話はあまりおめでたい話ではありませんから、見たくない、聞きたくないという

方もおられるかもしれませんが、今日はそういった上手な死に方のお話をぜひ先生にしていただきたいと思ってお呼びいたしました。もちろん上手に生きるほうもご専門でございますから、そういう話も今日はたっぷりあると思います。それでは久坂部先生、よろしく願いたします。（拍手）

上手に死ぬために必要なこと

久坂部 皆さんこんにちは。久坂部羊と申します。私よりも随分人生の先輩の方が多い中でお話しさせていただくのは非常に恐縮なんですが、私はもともと外科医をしておりました。麻酔科の仕事もしております。その後、小説を書くようになったんですが、外科医の後、高齢